

今回の部報は、保健体育科指導員の鈴木善博先生、鈴木大先生に今年度の指導員訪問の総括と来年度に向けての重要点について書いていただきました。

岡崎市立六ツ美中学校 鈴木 善博

1 指導員訪問を振り返って

新学習指導要領のキーワードである「主体的・対話的で深い学び」を踏まえた授業が、今年度も多くの学校で実践された。「主体的・対話的で深い学び」の実現のためには、指導方法の工夫により必要な知識及び技能の習得を図りながら、子供たちの思考を深める発言を促したり、気付いていない視点を提示したりすることによって学習を展開することが大切である。

(1) 「分かる」と「できる」をつなげる支援

仲間とともに課題解決を進める過程には、「課題に気付く」「核心に迫った気づきを全体に広げ、共有する」段階がある。この過程において協働的な学習をすることで学びは深まり、「分かる」が「できる」となって技能を高めることができる。

A中学校のB教諭は、2年生のゴール型球技（ハンドボール）の実践を行った。話し合いで解決策を見いだせない子供に映像資料を提示し、「この場面では、どこにスペースがあるかな」と問い、課題への気づきを促した。子供はその映像を基にして話し合ったことで、ドリブルで守備者を引き寄せると反対側にスペースができ、そのスペースに走り込んでパスをもらえばよいことに気付いた。この気づきをきっかけにして、子供はスペースを作ってパスをもらう動きを理解することができた。そして、この話し合いで理解したことを基にして、グループで繰り返し練習することで動きの改善することができた。

(2) どの子供にもできる喜びを味わわせる支援

楽しいと感じる体験が、運動に親しむ態度につながる。そのために授業者は、子供の実態を把握し、場の工夫やルールなどの適切な支援をする。そうすることによって、子供はたくさんの「できる」を味わえるようになる。

C小学校のD教諭は、1年生の跳の運動遊びの実践を行った。忍術修行をイメージした場を設定したことで、子供は夢中になって運動した。また、子供の実態を把握し、高さや距離を変えた易しいコースと難しいコースを準備した。この場の工夫により、子供は自分の能力に合ったコースを選択し、さまざまな忍術修行に挑戦しながら「できる」喜びを味わうことができた。

2 来年度に向けて

子供にとってよい体育の授業とは、「思い切り体を動かすことができる」「友達と学び合うことができる」「新しいことに気付くことができる」「技能を高めることができる」授業であると考えている。そこで、来年度は、仲間とともに子供自身が課題を見つけ、その解決に向けて「主体的・対話的」に活動することに重点を置く。このことの実現に向け、課題の見つけさせ方や学び合いのさせ方について、具体的な方法を明確にする。そして、運動が得意な子供も苦手な子供も、たくさんの「できる」を味わえるようにしていきたい。

1 指導員訪問を振り返って

(1) 「主体的・対話的で深い学び」を意識した実践

新学習指導要領が公示されて久しい。そこでは「主体的・対話的で深い学び」がキーワードとして注目され、多くの学校がこの命題に迫る授業を展開していた。今後は、課題の解決に向け、子供が主体的に、仲間とともに学習する体育の授業を構築していく必要がある。動きのポイントや技のこつなどを教師が一方向的に教えるのではなく、運動経験の中から子供に気付かせ、課題解決に向かうことができるような授業展開を心がけたい。

E中学校のF教諭は、2年生のゴール型球技（ハンドボール）の実践を行った。教師は、子供一人一人の技能習得段階に即した個人目標を設定させ、本時では全員が試合を行う中で、その目標を達成するよう促した。前時の課題を踏まえた目標が設定されているので、子供は自分たちで試合の合間に互いの動きについて教え合う。また、ゴールを円形とし、360度どこからでもシュートを狙えるようにした。得点が容易になったことで、チームの連係プレーによって、スペースへ走り込んだ仲間を見つけ、パスをつないでシュートに結びつけるという種目の特性に近づけることができた。個人目標の設定や教材の工夫によって種目の特性に触れ、仲間と主体的に気付きを深める子供の姿が見られた。このように、子供が主体的に活動できた要因としては、学習課題が子供の実態に合っていることやルールが複雑でないこと、そして何より教師が自作したゲームをみんなですること自体が楽しいことが挙げられる。よい体育の授業は、子供が夢中であり、教師が出る場面が少ない。

(2) 運動量を確保し、課題を見つけながら技能向上を図った実践

体育の授業において最も重要なことの1つは、運動量を確保することである。友達との話し合いなどによって動きを見直し、その改善を図ることも大切であるが、運動量を確保しないことには、机上の空論で終わってしまい、何が課題かが見えてこない。主運動など体を動かす活動を中心に据え、そこから課題を見つけ、仲間と解決していきながら技能を向上できるような授業の構築を目指したい。

G小学校のH教諭は、1年生のマットを使った運動遊びの実践を行った。教師は踏み切り板を使って坂道を作ったり、コーンを置いて障害物を作ったりと多様なマットのコースを準備した。子供は夢中になってマットを使った運動遊びを続ける中で、いろいろな方向へ転がったり、手で体を支えたりする楽しさを感じることができた。授業の終盤に、子供は助走の距離を伸ばし、両足で踏み切って高くジャンプする前転がりや俵状に丸まった友達を飛び越える前転がりなど、新しい前転がりを「発明」する。低学年における「〇〇遊び」では、夢中になって楽しく運動するうちに、目指す動きに近づくような場や教具の工夫が大切である。

2 来年度に向けて

体育は唯一、体を動かす授業形態である。その中で一番大切なことは、「安全面」の配慮である。このことを第一に考えていくことを、今後も忘れてはいけない。安全が確保された中で十分な運動量を確保し、教師が教えたい戦術や技のポイントなどが、子供から出てくるような授業を行いたい。子供同士の関わり合いの中で、よりよい動きづくりができるような体育の授業が求められている。また、活動を通して仲間への思いやりの心やお互いを認め合う態度など、学校で身に付ける社会性を育てていきたい。体育の授業は社会で起きるさまざまなことを含んでいる。そのことを念頭に、子供の能力を伸ばしたい。